

◆講演会 もっと知ろう、世界遺産◆

第3弾

中世都市鎌倉の面影を求めて

4月17日(土)、鎌倉市観光協会・推進協議会共催により、きらら鎌倉ホールで、東京大学史料編纂所准教授の高橋慎一郎さんの講演が開催されました。当日は、先に「第3回鎌倉世界遺産登録推進に向けての中学生作文コンクール」の最優秀賞受賞者による作文の朗読、「鎌倉と和賀江嶋」と「鎌倉の山々」について、実際に現地を歩いた県立鎌倉高校による「かまくら学」の研究成果発表が行われました。

以下は高橋慎一郎准教授の講演要旨です。

東京大学史料編纂所准教授
講師／高橋慎一郎さん



鎌倉は何度でも訪れたい街である。人々を惹きつける鎌倉の魅力はどこにあるか。古いものが残っている。それだけではない。鎌倉は一つの時代を象徴する歴史ある街であり、若宮大路や和賀江嶋だけでなく、街の構え、街のたたずまいが現在まで引き続き残っており、それが替えがたい魅力として人を魅了する。

自然環境は鎌倉幕府のできたところから、ほぼ変わっていない。ただ、現在の鎌倉は照葉樹林が多いが、鎌倉時代は松の木が多かったことが花粉分析でわかってきた。山が利用されると松が増えてくる。松の木があるのは人の手が入っている証拠。つまり、鎌倉時代、鎌倉の山には人の手が入っていたということだ。大きな地形は変わっていない。

山と山に挟まれた小さい谷の部分を「谷戸」という。この山と谷戸でつくられた鎌倉のたたずまいが鎌倉の魅力だ。新緑の季節、雨の後など非常にいい雰囲気を出している。谷戸の奥に行くと、静かな環境が保たれている。風の音、鳥の声、そういった環境が鎌倉の魅力のひとつになっている。

都市の構えは鎌倉時代に基本的にできあがり、現代まで残っている。街の中心の小高いところに鶴岡八幡宮が鎮座して、そこに向かってメインストリートである若宮大路が伸びている。その両側に居住部分があり、その外側の谷戸の部分にまで居住地が広がっている。谷戸の中にはお寺、神社、館が建てられ、今も遺跡として残っている。こういったものが谷の静かな自然環境とセットになって、非常に良い雰囲気の古都のたたずまいというものを残している。このように、鎌倉で重要な位置を占めているのは山と谷だ。

鎌倉は京都よりは遥かに規模が小さく狭いが、ここにたくさんの人が集まってきて住んだ。幕府の関係者、商人、宗教者、次々に集まってきて住むから、若宮大路沿いでは間に合わない。山とさかいのぎりぎりの部分にまで人が住み、新たなタイプの都市が構成された。山と山際の部分を積極的に取り込んだ都市。今もその地形を生かした形の住宅地が造られている。

山の名前は、鎌倉時代に遡るものはほとんどないが、唯一、六国見山は、鎌倉時代に使われていたと言ってよい。円覚寺の境内を描いた絵図が建武元年(1334)から2年(1335)頃、鎌倉幕府が倒れた直後に作られており、そこに六国見と出てくるので、それが一番古いだろう。現在の鎌倉山と違い、古い史料に出てくる「鎌倉山」は鎌倉を取り囲んでいる山をそう呼んでいるにすぎない。都の人にとっては、鎌倉は山で囲まれたところというイメージだったに違いない。

鎌倉時代に編まれた幕府の記録『吾妻鏡』に見える山の名前に、大倉山、名越山、甘縄山がある。この山の名前の付け方は「地名+山」というもの。一つの山ではなくて、一帯の山をひっくるめて呼んでいたのではないかな。

谷戸の名前はかめがやつ亀谷、いずみがやつ泉谷、いねかけがやつ犬懸谷、かさいがやつ葛西谷など『吾妻鏡』に多くみられる。比企谷、小笠原谷のように、有名な御家人の家名がそのまま谷戸の名になっているなど、谷戸は暮らしと密接に関わって様々な名を残している。こうしてみると鎌倉の街は谷戸や建物のある場所が中心で、山は屏風みたいなものとして発想されていたらしい。

切通は交通の要所。商売しやすい場所、将軍が納涼や雪見など遊びに出かける場所だった。葬送の場でもあり、また陰陽師の祭りなども行われていた。

伝統を持って、歴史の記憶を積み重ねてきた山々と史跡をセットにして保護していきたいというのが皆さんの願い。それを実現するのが世界遺産だ。全人類にとって貴重な文化財を護ろうという、一種の決意表明。こういった保存に対する決意表明と言う点では、鎌倉は早い時期から取り組んでいる。それが昭和36年の御谷騒動から古都保存法に結実し、鎌倉風致保存会が結成されたという永い伝統がある。このことが、谷戸景観の保存から生まれたというのが象徴的である。

最後にひとつ。世界遺産登録が現実化するなかで、鎌倉に本格的な歴史博物館がないのは本当に残念だ。平泉にもあるのに、なぜ鎌倉にできないのか。皆さんの叡智を結集して、建てたいと思う。

緊急インタビュー

鶴岡八幡宮神木・大銀杏の現状と再生の行方

平成 22 年 3 月 10 日未明、鶴岡八幡宮のご神木である大銀杏が強風で倒れて4か月。再生に向けて着々と準備が進められています。十年、百年先を見据えた再生過程は、世界遺産の理念に沿うものでもあります。大銀杏の保全・管理のトップである、鶴岡八幡宮宮司吉田茂穂さん（鎌倉世界遺産登録推進協議会副会長）、神奈川県生涯学習文化財・世界遺産登録推進担当課長（現文化遺産課長）西條由人さんに伺いました。



植え替えられた親木（左側）と葉が増えた「ひこばえ」（中央部の杭で囲まれたところ）——6月13日撮影

——大銀杏が倒れたと知った時はどんな思いでしたか？

吉田：大銀杏が倒れたのは、冷たいみぞれ混じりの強風が吹き荒れた3月10日の午前4時40分頃のことでした。私は、ご本殿の裏の方に住んでおりますので、職員からの電話で大銀杏が倒れたと知らされ、すぐに石段の上の本殿の前までかけつけましたが、それはありえない光景でした。しばらく呼吸を整え、とにかく騒ぐ心を鎮めました。最初に頭を過ぎったのは、責任者として木を守り切れなかったということに対する申し訳なさでした。

現場にかけつけた職員に伝えたのは、千年の長きにわたって神社と参詣者を守り続けてきた歴史に感謝しなければいけないということと、木霊・精霊が宿っているので、静かに休んでほしいという鎮魂の気持ちで、米・塩・酒を木に散供することと、重機を手配することでした。この大銀杏の倒れた姿を、大勢の参拝者の目に触れさせたくない、覆い隠したいという思いもありました。

西條：30センチから40センチの口径の大きさの主根4本が倒木した際にすべて折れてしまいました。東京農大の浜野周泰教授（造園樹木学）の所見では、4本とも既に枯死していたそうです。残っているのは小さな根で、その根から「ひこばえ」が育つことに期待してそのまま残し、倒れた幹についても、根もとの部分も含めて一段下がった場所に移植して再生を願うことにしたのです。昨年秋に、浜野先生が木の診断をした際には、幹自体には特に問題はなかったとのことでした。ただ幹の下の方の根の部分までは、気がつかなかったとおっしゃっていました。こうした状況を考えると老衰といった状態にあったと考えるのが妥当ではないでしょうか。

——どのように再生を考えておられるのですか？

吉田：当初再生は絶望と報道されました。しかし、後悔をしたくありませんでしたから、でき得る手はすべてやろうと思いました。専門の先生の診断によりますと、根は枯渇し中が洞の状態でした。それでも再生可

能になるように、根元から4メートルのところで切断し、元の場所から7メートル下段のところへ据え付けました。元の場所に残された根の塊りにある「ひこばえ」を親木が見守る姿になりました。

——樹齢を調べたらどうかとの声も聞かれますが？

吉田：植物学者が年輪を調べれば分かるようなところもあるだろうと思います。今回もいろいろな学者から調査したいという申し入れがかなりありましたが、一切お断りしました。信仰の対象ですので、調べて何年ということがわかったとしても、どうにもならないことです。

西條：昭和30年に県の天然記念物に指定されましたが、樹齢に基づいて指定されたわけではありません。市民・県民にとって大切な木だという判断があり指定されたものと思います。今回はもとの状態に戻ることは困難だと判断して、事実上の指定解除をしました。大銀杏のDNAを次代に引き継いでいきたいという気持ちは県も同様であり、再生に向けた取り組みを最優先に考えました。そのため、再生に向けた対応の妨げにならないように、指定にともなう法的な拘束を早期に解除する必要があったのです。

——世界遺産の観点で考えなくてはならないことは？

吉田：かつてそこで息づいていた人たちの感性とか思いとか、そういうものが建物あるいは町並みに込められているはずです。それを孫やひ孫へとつないでいこうというのが世界遺産の意義でしょう。魂だとか思いといったものが、時代の経過とともに大銀杏に寄せられてきました。目にする光景こそ変わったものの、その心をつないでいかねばなりません。

西條：国指定史跡としての学術的な価値判断という面では、鶴岡八幡宮の境内全体をとらえているので、大銀杏が倒れてもその価値は何ら変わりません。世界遺産としての価値や評価も変わりません。市民がここで（大銀杏を）守っていくのだという姿を外に発信することで、武家の古都・鎌倉の世界遺産登録に向けた市民全体の思いが伝わるのではないのでしょうか。